

臨床実習における看護学生と1,2年目看護師、実習指導者の考え方の相違について

生命育成看護科学講座

指導教員：遠藤誠之

氏名：林里紗

キーワード

臨床実習 ストレス 認識の相違

【目的】

看護学生にとって臨床実習は大きなイベントであり、看護師としてのプロフェッショナリズムを自覚するために重要である。一方で実習指導者にとっても、将来看護師となる人材を育てるという責任ある業務であり、心理的負担は大きい。実習中、学生間では患者さんを受け持っていることによる責任や看護に対する不安とともに、実習体制へのストレスを耳にすることが多かった。こういったストレスの要因の一つとして、指導側と学生側の実習に対する考え方には相違があるのではないかと考えた。本研究では、臨床実習に対する立場による認識の相違を明らかにし、実習指導者側に指導体制を見直すきっかけを提示するとともに、看護学生に対して実習に取り組む姿勢の改善やプロフェッショナルを教育するという指導者の意図の理解を促すこととした。

【研究方法】

・予備調査
2019年度、看護実習を終えた大阪大学医学部保健学科の看護学生75名に対し、GoogleFormのURLを送信し、実習中に感じたことについて記述式のアンケートを行った。本研究では、看護学生の実習におけるストレスに着目するため、あえて看護学生が実習中にネガティブに捉えた要素についてのアンケート調査を行った。その回答をKJ法にて項目に分類し、本調査の質問項目を作成した。

・本調査
予備調査をもとに作成した選択式アンケートを2019年度、看護実習を終えた大阪大学医学部保健学科の看護学生75名、大阪大学医学部附属病院の実習指導者・1,2年目看護師200名(概算)に対して行った。どちらもGoogleFormを利用したが、学生に対してはURLで送付し、実習指導者・看護師に対しては各部所の師長を通して、研究の説明とQRコードを記載した用紙を配布した。

【結果】

2019年12月6日までに学生36名、1,2年目看護師50名、実習指導者23名の有効回答を得た。3群の回答を比較した円グラフは本文に掲載している。3群の結果の傾向から、「3群間で大きな差のなかったもの」、「学生と1,2年目看護師の間で差が小さく、実習指導者とその2群間で差があるもの」、「1,2年間看護師と実習指導者間では差が小さく、学生と看護師間では差があるもの」、「3群間で経験に伴い、徐々に変化するもの」という4種類に分類された。

【考察】

3群間で大きな差のなかったものは、3群間で共通認識をもつことで実習におけるストレスを軽減できるものではないかと推察する。学生と1,2年目看護師の間で差が小さく、実習指導者とその2群間で差があるものとしては、主に、学生の実習態度や環境についての項目が挙がったが、これらは実際に学生の指導を担当する実習指導者とそうでない1,2年目看護師間で差が生まれる項目であると言える。1,2年間看護師と実習指導者間では差が小さく、学生と看護師間では差があるものでは、学生の指導する際の対応に関するものが挙がった。学生の回答には実習中の萎縮が見られ、看護師側の回答には指導の工夫への考えが見られた。3群間で経験に伴い、徐々に変化するものは、仕事を重ねる中で考え方方が変化していく特徴があると言える。

【結論】

本研究では、看護学生、1,2年目看護師、実習指導者の臨床実習に対する考え方の一部を知ることができた。3群間で違いが見られたもの、大差がなかったもの、2群間で考えが近く、もう一方の群とは違いがあったものなど質問項目によって結果はさまざまであったが、全体を通して得られた課題がある。それは、学生と指導者間での相互理解の必要性である。看護学生の回答では、指導者の意図をくみ取れず、ストレスを感じ、萎縮してしまっていると考えられるものが多くあった。一方で、1,2年目看護師や実習指導者の回答では臨床実習に来る看護学生への優しさや指導的配慮が見られるものが多くあった。看護学生がネガティブな方へ思い込みやすいと考えられる内容について、看護師や実習指導者の考え方を実習前の学生に共有することで、実習中の指導側と学生側のコミュニケーション、学生の学習効果、パフォーマンス向上などを図ることができるのではないかと考える。また、指導側にとっても学生の実習への感じ方を知ることで、より良いコーチングや声掛けの工夫を考える一助となるのではないかと考える。